

# 短期留学プログラムの限界と可能性

川 崎 淳 子

## Short-term Overseas Study: Limitations and Possibilities

Junko Kawasaki

### 抄 録

アメリカへ留学する人の数は増加の一途をたどってきたが、最近では学部、大学院レベルへの留学が主流を占める一方で、語学留学者の数は減少傾向にある。もう、大学が短期（語学）留学を提供する意味はないのだろうか。本学には「地域研究」という、リサーチ色の強い、独自の短期留学プログラムがある。10年を過ぎ、その内容や学生の満足度において、ある程度の完成を見るに至ったが、それまでの道のりは平坦ではなかった。本稿は、1991年度からの4年間に試みたプログラム見直しのプロセスを追い、大学や短期大学における短期留学の、新たな可能性の追求に資することを目的とするものである。短期留学ばなれの傾向とも言えるなか、学校として同種のプログラムを提供する際の、一つの手掛かりとなれば幸いである。

キーワード：短期留学、評価、特徴の明確化、継続性

(1995年9月1日 受理)

### Abstract

The number of people going to America to study is still increasing, but recently the increase has been those studying on the undergraduate and graduate levels, while those going for language study are decreasing. Is there no longer any reason for a college to have a short-term overseas study program. Our school has its own particular short-term program called "Area Studies" with a strong research emphasis. Ten years have passed and the program has achieved a certain stability in form and student satisfaction, however, it was not always a smooth road. This paper will look at the process of reexamining the program during the four year period since 1991. It is hoped this will be a resource for exploring the possibilities of new short-term study programs for colleges and junior colleges. Given the decline in short-term study, this may be one suggestion for a program schools could offer.

**Key words** : Short-term study, Evaluation, Clarification of Uniqueness, Continuity

(Received September 1, 1995)

## 1 はじめに

### 1.1 近年の留学傾向—短期留学の意義—

近年、留学は、そのこと自体は珍しいことではなくなりつつある。特にアメリカへの日本人留学生は多く、国別では中国に次いで第2位であり、その数の推移を見ると、1989～90年には29,840人、1990～91年には36,610人、1992～93年には42,840人と毎年2割前後の伸びを見せ、この5年間では約3倍に達している (Institute of International Education, 1994)。しかし、留学生の総数がこれほどの伸びを見せているにもかかわらず、語学留学と呼ばれる米国内の英語研修プログラムを果たす留学生数は減少傾向にあり (日米教育委員会、1995)、留学生全体の割合でも、大学73% (内19%は2年制大学)、大学院16%であるのに対し語学留学は11%に留まり、大学、大学院レベルへの留学が中心となっている。

語学留学ばなれの傾向とも言えるなか、いま短期 (語学) 留学プログラムの意義はどこに見出せるのであろうか。「留学とは本来学問を深めるための一つの手段であり、この目的のために実行されるもの (日本国際教育協会留学情報センター、1994)」であるわけだが、その本来の目的を、期間の限られた短期留学で果たすことは可能なのだろうか。

「留学 (学位を取得するような長期の留学)」を望む学生は、短期留学の中にも留学そのものの体験を、あるいは留学に対応できるだけのレベルを期待していると考えられる。その「留学」の場合、留学先国の大学で必要な英語力として、アメリカへの留学生を対象とした資料では以下のように述べている。"You will be expected to read, write, understand, and speak English to carry

out your studies. Conversational English only will not be sufficient. (The College Board, 1995)" このように、留学生に「読む」「理解する」力が求められることを指摘しているのだ。また、同じ英語圏であるイギリスへの留学については「英語学校以外の機関で何か専門の勉強をするためには、それに必要な高度な英語力があるということは重要な条件であり、その上でさらにそれぞれのコースに応じて一般的な学歴や専門的な予備知識が必要条件として求められる (ブリティッシュ・カウンシル、1994)」とある。ここでは一般的な語学力だけでなく、専門性を備えていること、あるいはそのためのアプローチ能力の重要が強調されているのである。

本学の短期留学プログラム「地域研究」は、異文化理解と語学力の修得を統合するといった、独自のねらいをもって開講されたが、この数年でプログラムの特徴が明確化され、まさに「読む」「理解する」ことをも含んだ、「留学」を体験できる内容にまで至っている。1990年度をピークに履修者数は減少の傾向をみせており、短期留学ばなれかとも思われたが、参加者の満足度は逆に上昇し、学生側に依然ニーズのあることを、そしてその期待に僅か1カ月の留学が応え得ることを物語っているのである。プログラムの特徴が明確化され、履修する学生の目的意識が高まったことが、高い満足度に結び付いたのだと考えられる。

### 1.2 本学の「地域研究」

本学の「地域研究」は、2年生の後期科目として開講されており、授業の一環として1カ月の留学が実施される。一般教育科目的な性格を持った、リサーチ色の強いプログラムである。この「地域研究」は、出発までの約8週

間、週2時間の授業を通して、個々の学生がアメリカ社会についての仮説を立て、それを文献と Davis でのフィールドワーク（現地の人達へのインタビュー）から検証し、結果を1,500語の研究ペーパーにまとめるというものである。短期大学生に課す内容としてはかなり欲張ったものと言えよう。レベルの高さに加え、短期間で相当量の課題をこなさなければならないため、履修を希望する学生は TOEFL で470点を取得していることが求められている。

これらの目標のため、プログラムの開設にあたっては、既製の語学研修等ではなく、本学のリクエストに対応の可能な機関を探していた。結果、現在の提携校である University of California, Davis (UCD) との提携に至ったのである。UCD スタッフより、我々の意図への理解を得て、両校の協力のもと、本学のオリジナルプログラムが作られた。その内容は斬新かつ豊富である。プログラムの主なねらいとしては、①英語力の向上、②調査によるアメリカ社会の理解、③異文化における自分自身への気づきの3点を掲げている。現地の授業は現在3科目。「地域研究」の中心とも言える“Intercultural Research”は、教員のきめ細かい指導を受けながら、文献やインタビュー結果をペーパーにまとめていくもので、残る“Introduction to American Culture（以下、“American Culture”）”及び“Communication Skills”は、“Intercultural Research”を支える形をとっており、前者は、トピック内容を深める基盤として、学生が広くアメリカ社会を理解することを、後者は、より効果的なインタビューを行うためのコミュニケーション力を養うことを目的として設けられている。

プログラムの3つのねらいのうち、まず英

語力について特徴的なのは、目指す力の中心が「書く」ことである点、また、いわゆる「英会話」ではなく、リサーチという特定の意図を持ってコミュニケーションすることに主眼をおいている点である。2点目のアメリカ社会の理解については、ごく短期間に、広大なアメリカのほんの一部から全てを知ることは不可能だという、当然の事実を前提としている。そのため、4週間で調査が可能な範囲のトピックを個々の学生が設定し、全メンバーでテーマの調整をすることで、クラス全体で幅を持って理解を深める工夫をしている。学びの場は教室に留まらない。海外へ出掛けていくことの大きなメリットの一つに、異文化間の理解が挙げられる。このプログラムでは、Davis での滞在期間中は全員がホームステイをする。単なる共同生活、居候に留まらず、リサーチを基盤とした理解、あるいは理解しようとする姿勢のもとでのホームステイであるところが意義深い。これは、学生が異文化に身をおいた自身を第三者的に見つめ、気づきを得る機会ともなっている。

Davis での授業を終えると、学生はホストファミリーに別れを告げ、観光のために移動する。この1日観光は、授業に、ホームステイに集中し、全力投球した4週間から日本の現実に帰る間の、ワンクッションの役割を果たしている。そして帰国後、日本での授業が更に2回行われる。そこで学生たちは、改めて自身のリサーチを振り返り、異文化における自らの気づきを分かち合う。本学の担当教員にとっても直にフィードバックを得ることのできる、貴重な機会となっている。

### 1.3 本稿のねらい

今、10年を過ぎ、内容や参加学生の満足度において、「地域研究」はある程度の完成を見

るに至っている。しかし、その道のりは決して平坦ではなかった。開講3年目にして、就職協定の変更から夏のプログラム実施ができなくなったこともその一つであるが、内容が定着し、学生の満足にも疑いを抱かずに年を重ねるうち、双方の担当者が替わり、あるいは学生の状況が変わり、気づいたときは、プログラム内容も学生の反応も、かなり変貌していたからである。学生が必ずしも満足している訳ではないことが、一部の学生の声からわかり、当初のねらいに立ち返ってのプログラムの見直しを図ることになった。

ここに、1991年度から1994年度に行った、見直しに係るプロセスを追ってみたい。この4年間は、プログラムの位置づけを明確にするだけでなく、これからの方向性を探る上で非常に重要な期間であったと言える。手探りの状態からの作業を振り返ることは、冒頭で述べた短期留学ばなれとも言える状況のなか、ある程度の評価を得てきたプログラムであるだけに、今後同種のプログラムを運営する際の、手掛かりにもなればと考えるのである。

## 2 プログラムの評価

### 2.1 評価のフレーム

評価にあたっては、“プログラムの成功、改善の成果を、何をもって計るか”が、最も大切な問題であるが、主役である学生の満足度はまず一つの大きな基準となろう。学校主催のプログラムである以上、量的な評価(人数)も無視できないため、全体に占める評価の割合も考慮の対象となる。しかし、毎年、参加人数やクラス数など、基本的な条件が異なるため、学生の評価がどこからくるものなのかを見極めることも重要である。そこで、量的な評価と、質的な意味での個々の評価の双方

が可能な手段をとることにした。以下はその具体的なプロセスである。

見直しの第一歩は、「現状を把握する」ことであった。もちろん、現地でのスケジュール表はUCDより送られてくるが、紙には表れない部分の把握、つまり現場の温度といったものを知ることが必要であった。引率者を頼ることは、ある程度可能である。しかし、引率者(当時は教員のみ)の目線は学生のそれとは違う。また、教師の立場として教室に居続けることは、UCDのスタッフにも学生にも威圧感を与えかねない。更に、現地のクラスは複数に分かれており、その違いを含めて客観的に全てをつかむことは不可能だと思われた。そこで、手段として考えたのが「ダイアリー」である。

ダイアリーを使用したのは1991年度からの3年間であるが、いずれの年も1~5の数字による5段階の評価欄と自由記入欄を設けた。数字による評価は、「授業」と「課外の活動(フィールドトリップ、午後の活動、帰路の1日観光)」に項目が分かれる。そのうち「授業」では、理解度(授業の内容をどの程度理解できたか)、意義(授業内容に意義を感じたか)、興味(内容には興味を持てたか)、教師(教師に熱意は感じられたか)の4つの項目(1993年度以降はこれに「充実感:どの程度充実感を得られたか」の項目が加わる)を、「課外の活動」では、自由行動を含めてその日の評価を、興味、意義の2つの項目を設けて、3を中心に評価が高いほど5、低いほど1に向かって、思いつくまま記すものである。この数字による評価は、表現等に若干違いはあるものの、毎年ほぼ同一の選択肢を設けたことから、複数年で状況の変化を追うことができた。ダイアリーを廃止した1994年度についても、帰国後同様の選択肢をもってアンケー

ト調査を行っており、ある程度の比較が可能となっている。

手段の一つとしてダイアリーを使うことには、他にも多々メリットがあったが、その最大の利点は、状況を時系列で捉えられたことである。僅か1カ月とは言いながら、その間に学生の印象は変化する。覚えているつもりでも、人間の記憶、特に感情などは曖昧で、時間が経つにつれ、その後の経験に紛れ美化されること等も考えられる。その点、毎日の記録があれば些細な変化もわかり、全体を見渡せばどの時点で評価が変わったのか、そのきっかけまでもを推察することができる。更に、個々の学生の状態を知ることができたため、精神面でのフォローが必要なときにも役立つ。

ダイアリーの使用にあたっては、学生に対し事前に主旨を説明し、帰国後一旦回収し読ませてもらうため、支障のある個人的な内容は控えてほしい旨を伝えていたが、学生によってはそれが唯一の記録手段となり、中には毎日溢れるほどに書き連ねる者もいて、参加する学生たちの思い入れを覗かせた。

以下は、1991年度からの評価と見直しの経緯である。その詳細は、「地域研究」を管轄する本学提携校委員会において毎年検討され、実施されてきたものであるが、ここでは主なポイントを絞り、年を追って述べていきたい。

## 2.2 評価の結果と考察

### 2.2.1 1991年度「実態の調査」

見直しの初年度にあたる1991年度は「実態を知る」ことに焦点をあて、主に以下の3つの点についての把握を目指した。

- (1) プログラムは実際どのように進められているのか（全体の把握）

- (2) 具体的にどのような内容で授業が行われているのか（授業）

- (3) 学生は何を求めている、何が満たされていないのか（学生）

手段としては、2.1に挙げたダイアリーを主に用い、学生からの直接の聴き取りと本学引率者及び現地スタッフからのフィードバックで細部を補った。この年の参加者は27人、そのうちダイアリーは、有効なサンプルが22人分と8割程度、また聴き取りは約3分の1にあたる8人から行った。最も重要な役割を果たしたダイアリーは、日々の生活に追われ数字のマークさえままならない学生もおり、有効数は8割に留まったものの、項目別に集計するなどして、有益なデータを得ることができた。これにより、最終的に、参加者自身について、毎日どの項目にどのような評価をくだしていたかが、1カ月の時系列で分かる、ということになる。

さて、作業の第一段階は「全体の把握」、つまりプログラムは実際どのように進められているのか、具体的なスケジュールの把握である。これは学生の自由記入欄が頼りになるため、ダイアリーをクラス毎（2クラス）に分け、それぞれについて全員のコメントを拾い上げて時系列で記入していった。この年は英語力を測るプレースメントテストでのクラス分けがなされていたが、クラスによって授業の内容に若干の違いがあることも見えてきた。また、教員の病気欠勤等が原因で、時には2クラスが合同で授業を受けることもあり、そのあたりの事情も学生の不満と共に見えてきた。

次に「授業内容の把握」である。これには授業の自由記入欄を用いた。この欄には、毎日の授業内容、使用した教材や感想欄などを含んでいたが、学生自身に内容を記述しても

らうことで、授業の内容だけでなく、学生の理解度をも知ることができるなど、予想外のメリットもあった。こうして、全体の流れと併せ、個々の授業の内容や流れを把握できたことは、学生の求めているもの、また満たされなかったことを知る上で、とても重要な役割を果たすこととなった。

作業の第三は「学生の評価」、すなわち数字の読み取りである。まず、個人々人についての評価が、項目毎に日を追って1枚のシート上で分かるように、個別の一覧表を作り、それを22人分、22枚のシートに集約した。22枚のシート上の数字を追ううちに、全体に共通する一つの特徴が見えてきた。数字の変化に波が見えるのである。先に作成したスケジュールと併せてみると、週末の休暇を節目に、大きく1週間毎で変化があることがわかってきた。そこで、まず個人々人について、1週間毎に項目別の平均値を出し、続いてクラス毎にその平均値をとってみた。そして、4週間を通しての全平均値と、科目毎の3ポイント台以下、及び4.8ポイント以上の割合を併せて一覧にしたものが、表1の結果である。

具体的にはどうだったか。変化の特徴が表れるように、表1の3ポイント台以下、つまり満足度の低かった項を拾いあげると、“Intercultural Research” 6%、“American Culture” 42%、“Communication Skills” 53%、“Lecture and Discussion” 25%と、プログラムの中心である“Intercultural Research”はともかくとして、あとの3科目は非常に厳しい評価となっている。特に“Communication Skills”については、しめくりとも言える最後の週に評価が下がり、2ポイント台なる最も低い評価を示すなど、他の科目との差が歴然となった。もう一つの特徴としては、クラス間の差が挙げられる。“American

Culture”では、Aクラスの評価が日を追って低くなっているのに対し、Bクラスの場合は上向きになっている。これらの読み取りは、1週間毎にデータを追って初めて分かるもので、4週間のトータルだけでは見えてこなかったろう。

さて、数字の評価を読み取るにあたり、どこから“検討の余地あり”とするかも考慮すべき重要な点であった。3ポイント台、つまりそこには限りなく4ポイントに近い数字も含まれているわけだが、これを低いとするか否かは留意すべき点であろう。そこで質的データとしての自由記入欄の意味が認められる。生の声、というのは迫力がある。それも、ダイアリー故に語られる言葉は口語調であり、学生の感情がストレートに伝わってくる。その解釈を曲げないために、資料にはすべて学生の記述そのままを抜き取り、肯定的な部分には青、否定的なものには赤、次年度への提案、検討事項については別の色、というように、評価を視覚的に捉えてみた。資料は26ページにわたったが、圧倒的に赤色が多く、学生が決して満足していない状況を物語っていた。そこで3ポイント台、つまり3.9以下を検討の余地ありとする、少々辛いとも言えるラインを引くことにしたのである。

では、学生は何を求め、何が満たされなかったのか。学生の不満は大きく分けて、次の5点になる。スケジュールが過密であること、授業内容に手応えが薄いこと、自分のリサーチペーパーに深みを感じられないこと、書くことが中心で、oral communicationの場が少ないこと、そして、UCD教員の評価が甘いこと、である。この年の授業日数は、4週間のうち13日。プログラムが夏から冬に移り、クリスマスやニューイヤーズデイ等、カレンダー以外の休日を含み、日数が限られる

表1：1991年度「地域研究」学生の評価・数字一覧表

	項目	クラス	週毎の評価				全期間 の平均	全期間において各科目に占める割合	
			1週目	2週目	3週目	4週目		3ポイント台以下	4.8ポイント以上
Intercultural Research	理解度	A	4.6	3.9	4.4	4.4	4.3	6%	6%
		B	4.1	3.9	4.2	4.3	4.0		
	意義	A	4.5	4.1	4.5	4.3	4.3		
		B	4.2	4.5	4.2	4.4	4.3		
	興味	A	4.3	4.2	4.2	4.0	4.2		
		B	4.2	4.5	4.2	4.2	4.2		
	教師	A	4.8	4.3	4.7	4.5	4.6		
		B	4.8	4.6	4.6	4.3	4.5		
American Culture	理解度	A	4.1	4.0	3.9		3.9	42%	0%
		B	4.1	3.9	4.3		4.1		
	意義	A	4.0	3.7	3.7		3.8		
		B	3.9	4.0	4.2		4.0		
	興味	A	4.0	3.8	3.6		3.8		
		B	3.9	3.9	4.2		3.9		
	教師	A	4.2	4.1	3.8		4.0		
		B	4.6	4.5	4.7		4.6		
Communication Skills	理解度	A	4.3	4.4	4.4	3.6	4.2	53%	0%
		B	4.1	4.3	4.3	3.8	4.1		
	意義	A	3.5	4.0	3.2	2.5	3.3		
		B	3.8	3.5	3.7	3.2	3.6		
	興味	A	3.7	4.1	3.6	2.6	3.4		
		B	4.1	3.9	4.0	3.4	3.9		
	教師	A	3.8	4.0	4.0	3.1	3.7		
		B	4.7	4.5	4.6	3.9	4.5		
Lecture and Discussion	理解度	A		3.6		4.4	4.0	25%	0%
		B		3.3		3.9	3.5		
	意義	A		4.0		3.7	3.8		
		B		4.1		4.0	4.1		
	興味	A		4.2		4.1	4.2		
		B		4.4		4.6	4.5		
	教師	A		4.0		4.5	4.3		
		B		4.3		4.3	4.3		
プログラム全般（3科目を通して）に占める割合							32%	2%	

ためである。この間に4科目62時間の講義を受けて宿題をこなし、インタビューを行い、文献を読んでペーパーを仕上げるのだから、忙しいスケジュールであることは明白であ

る。学生にしてみれば、机上の勉強だけに来たのではない、という思いがあり、また、そこまで努力しているにもかかわらず、時間不足で満足できる内容のペーパーが仕上がらな

いため、苛立ちを覚えたのだと推察する。そして、これは本学の学生の特徴であろうが、実際以上の評価を与えられたことが、不満として表れた。メインの研究ペーパーを見ても、帰国後の本学の担当スタッフによる評価に65点から95点まで幅があるのに対し、UCD の評価では27人中17人が A、残る10人も A-と、実に全員が A を与えられた。UCD スタッフの弁によると、決して点数を甘くしたわけではなく、UCD を訪れる他のグループと比較すると自ずと評価が高くなったとのことであったが、これは学生に共通する大きな不満として残ったようだ。

### 2.2.2 1992年度「試行錯誤①」

見直しの作業にあたっては、まず問題点を見極めることが大切であると考え、前年度の課題を本質的なものと技術的なものの2つに大別することにした。(具体的な内容については、表2を参照していただきたい。)

まず、技術的な問題の解決にあたっては、主に次の点を具体策とした。

#### (1) スケジュールの緩和

フィールドトリップの日程変更や、一部科目の統合により、授業日数を2日増やし(13→15日)、全体の授業時間数を7時間軽減して(62→55時間)、全般にゆとりを持たせた。

#### (2) クラス間の格差の緩和

主な教員に、科目を違えて両クラスを担当してもらう、またリサーチペーパーのアウトライン(インタビューのサンプル数、ペーパーの語数等)を明確にすることで、クラス間の不公平感を軽減した。

#### (3) oral 面の充実

UCD 学生との discussion について、学生が主体的に取り組める環境を作り(ト

ピックの選定、授業の構成)、最後に1人10~15分程度で oral presentation とその場での質疑応答を課すこととした。

#### (4) 担当教員が不在時の対応

スタッフの不意の欠勤時には、授業の継続性が守れるような体制を依頼した。

以上のように、技術的な課題は比較的解決が容易と言えるだろうが、本質的なものについてはUCDの深い理解と協力が不可欠である。そこで、1992年度は主に以下の3点について、UCD スタッフの理解を促した。

#### (1) 個々の科目の意味付け(特徴の明確化)と目的の理解

#### (2) 本学の学生に対する適正な認識と評価

#### (3) ESLに留まらず、深くトピックに関わること

この3点が解決できれば、学生に少なからずの充実感を与えることができるはずである。しかしそれは、課題のどれもが数字などで測ることのできない問題であるために、非常に困難に思われた。ここで最も助けられたのは、UCD スタッフの熱意と協力である。幸いにも、1991年度から Assistant Director として本学のプログラムを担当したUCD スタッフの来学を受け、提携校委員会の場で、直に、そして率直に話し合う機会を得ることができた。face-to-face のコンタクトの重要性を、まさに実感することとなったのだが、両校に共通する“いいプログラムにしたい”という熱意が通じ、本学のリクエストに全力で応えたいとの理解を得ることができた。結果、この非常に抽象的とも言えるリクエストが、かなりの手応えをもって、学生の、そしてUCD スタッフの高い評価として返ってくるのである。

プログラムの評価方法は、概ね前年度を引き継ぐ形をとった。この年、引率者の一人と

表2：「地域研究」概要と見直しの経緯（'91～'94年度）

	'91年度	'92年度	'93年度	'94年度	
主 題	改善のポイント <ul style="list-style-type: none"> <li>現状の把握 全体の流れ 授業の実際（内容） 学生（何を求め、何が不満なのか）</li> </ul>	改善状況の確認 <ul style="list-style-type: none"> <li>個々の授業の意味付け、目的の理解 本学学生に対する適切な認識、評価 トピック内容への深い関わり 継続して検討するための体制</li> </ul>	改善状況の確認 <ul style="list-style-type: none"> <li>目的の理解と両校の共有 目的を達成し得るリサーチ（指導）環境か スケジュール（全般、各科目内）は適切か 継続して検討するための体制</li> </ul>	呼びかけと指導方法の見直し <ul style="list-style-type: none"> <li>内容の特色と参加学生の目的は合致しているか 「個人留学」としての意識付け（学生）</li> </ul>	
プログラム	授業科目	“Intercultural Research” “American Culture” “Communication Skills” “Lecture and Discussion” 計 62 時間	“Intercultural Research” 36 “Introduction to American Culture” 9 “Communication Skills” 10 計 55 時間	“Intercultural Research” 36 “Introduction to American Culture” 9 “Communication Skills” 10 *IRをACとCSが支える（統合） 計55時間	“Intercultural Research” 36 “Introduction to American Culture” 9 “Communication Skills” 10 *IRをACとCSが支える 計 55 時間
	授業日数	13 日間	15 日間	17 日間	17 日間
調査・評価	課 外	フィールドトリップ：4 回 帰路の一泊旅行：Disneyland	フィールドトリップ：4 回（従来の休日にも実施） 帰路の一泊旅行：Disneyland	フィールドトリップ：2 回 帰路の一泊旅行：San Francisco	フィールドトリップ：2 回 帰路の一泊旅行：San Francisco
	手 段	<ul style="list-style-type: none"> <li>ダイアリー（回収率：22/27, 81%） 数字による5段階評価 （理解度、意義、興味、教師） 自由記入からの読み取り</li> <li>一部学生からの聞き取り</li> <li>引率者（1名）からのフィードバック</li> <li>現地スタッフからのフィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ダイアリー（回収率：22/24, 92%） 数字による5段階評価 （理解度、重要性、興味、教師の熱意） 自由記入からの読み取り</li> <li>一部学生からの聞き取り</li> <li>引率者（2名）からのフィードバック</li> <li>現地スタッフからのフィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ダイアリー（回収率：20/20, 100%） 数字による5段階評価 （理解度、重要性、興味、教師の熱意、 充実感） 自由記入からの読み取り</li> <li>引率者（1名）からのフィードバック</li> <li>現地スタッフからのフィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価表（帰国後）（回収率：14/15, 93%） 数字による5段階評価 *現地授業を含めた総合評価も得る （理解度、重要性、興味、教師の熱意、 充実感）</li> <li>アンケート（記述）（回収率：12/15, 80%）</li> <li>引率者（1名）からのフィードバック</li> <li>現地スタッフからのフィードバック</li> </ul>
次年度への課題（見直しのポイント）	参照資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>数字評価の平均</li> <li>スケジュールの流れ</li> <li>自由記入からの読取（色分け）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>数字評価の平均</li> <li>スケジュールの流れ</li> <li>自由記入からの読取（色分け）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*数字評価平均はサンプル数が少ないため、特に参考にはしない。</li> <li>自由記入からの読取</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>数字評価の平均（総合評価）</li> <li>自由記入からの読取</li> </ul>
	本質的問題点	<ul style="list-style-type: none"> <li>個々の授業の意味付けと目的の理解</li> <li>本学の学生に対する理解</li> <li>トピック内容の深さ（ESL教員の限界）</li> <li>教員によるクラス間の差</li> <li>プログラムの継続（理解）の困難（スタッフの入れ替わり＝体制）</li> <li>学生の成績評価（本学との差）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>UCDの体制（スタッフ間での情報の共有）</li> <li>教員によるクラス間の差</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生にとって「書くだけのプログラム」のイメージ</li> <li>リサーチ環境の限界（短期スケジュール、学生の英語力及び姿勢）</li> <li>内容の特色と対象学生の像が曖昧（学生の目的により、満足度に差）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>担当者（窓口）の交替に際し、情報の継続性がどこまで守れるか</li> </ul>
	技術的問題点	<ul style="list-style-type: none"> <li>スケジュールの調整 開講の時期 全般のゆとり 科目内の時間配分</li> <li>インタビュー、ペーパーに関するアウトラインの曖昧</li> <li>本学での指導とのギャップ、重複</li> <li>教員不在時（体調等）の対応</li> <li>学生の参加意欲 discussionのトピックが難解 ” ” 本学と重複</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スケジュールの調整 全般のゆとり</li> <li>インタビューの質（サンプル数、対象の限定）</li> <li>本学での指導とのギャップ</li> <li>「発音学」の全面削除</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>oral presentation, discussionが削減、削除された（認識の誤りによる）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インタビューに係る時間が短い</li> </ul>
ホームステイ	滞在先：Davis, Dixon <ul style="list-style-type: none"> <li>ホストファミリーの選定（目的意識）</li> <li>問題発生時の第三者の介入</li> <li>1人/2人でステイすることの納得</li> <li>学生の意識（依存心等）</li> </ul>	滞在先：Dixon, Woodland <ul style="list-style-type: none"> <li>ホストファミリーの選定（目的意識）</li> <li>問題発生時の第三者の介入</li> <li>学生の意識（依存心等）</li> </ul>	滞在先：Dixon <ul style="list-style-type: none"> <li>学生の意識（依存心等）</li> </ul>	滞在先：Dixon	
その他		<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の「書く力」不足の指摘</li> <li>内容充実のためには2～3カ月が必要</li> <li>論文集の作成開始</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>手引き冊子による指導</li> <li>図書館の積極的な利用</li> <li>学生間での環境作り</li> </ul>	

して、事務担当スタッフの筆者が同行することになったが、現地スタッフの協力体制や学生たちの生きた表情を目の当たりにできたことは、プログラムの成果を肌で感じるだけでなく、その後のUCDスタッフとのコミュニケーションや学生の指導において、大いに役立つこととなった。

さて、見直し1年目の成果である。まず、学生の評価はどうだったか。表3を参照していただきたい。1991年度と同様に3ポイント台以下を拾い上げると、科目別には“Intercultural Research”3%、“American Culture”13%、“Communication Skills”17%、そして、3科目を通しプログラム全体に占める割合をみても、32%から10%となり、低い評価をする学生が激減している。また、3.5ポイント未満の数字は見当たらず、すべての項目について、週が進むにつれ評価が上向きなものもプラス評価と言える。もう1点、見逃してならないのは、4.8ポイント以上の高い評価が全体の31%を占めることである。学生側からの評価は、まさに飛躍的な伸びを見せたと言えるだろう。

次に、本学の学生に対するUCDスタッフの評価である。こちらも、学生の高評価を映すような結果となっている。前年度と同様に、リサーチペーパーの評価で比較してみると、UCDスタッフによる評価はAからC+までの6段階に分かれており、A及びA-が38%、B-、B及びB+が58%、そしてC+が4%となっている。それに対し、本学スタッフの評価は70点から95点の幅となっており、80点以上、70点台、70点未満と分けると、それぞれ42%、58%、0%と、UCDと似通った評価の割合を見せている。UCDのスタッフが本学の意図を十分に理解し、学生を適切に評価したことが、学生の満足度にも表れたのかも

知れない。内容の充実を映してか、その年、学生による論文集が生まれた。自分たちで作成できる環境だけを与え、学生の自主性に任せたとこころ、24人中半数の12人が参加したのである。帰国後、通常の授業のペーパー作成や後期試験に追われながらタイプアウトし、印刷、製本と自力で作った大作は、学生たちの、自身の論文に対する愛着を物語っていた。

この年、リサーチペーパーを担当したUCDスタッフより、評価の点で核心をつく課題が挙げられた。それは、学生の「書く力」の不足、また滞在期間の問題である。本学からは、いわゆる作文力だけでなく、リサーチの内容にまで踏み込んだ、論文としての質の評価までを希望していたが、最終的には、学生の努力、つまり個々の学生がどれだけ伸びたか、が評価の対象とならざるを得ないとのコメントであった。つまり、リサーチとして成り立つためには、学生がいかに努力したとしても、その深さには限界がある。特に、4週間でめざましい進歩は遂げたものの、もともと書く力がまだ弱い。文献を読むといっても、図書館を使いこなして量を読むだけのスケジュールのゆとりもない。せめてもう少し期間が延長できれば、というのが、現場のスタッフからの率直な意見だったのである。この課題は、本学の学生を高く評価してこそのものであり、歓迎するとともに、その後の検討事項として残された。

### 2.2.3 1993年度「試行錯誤②」

1993年度は、試行錯誤の2年目にあたる。まず、この年の課題は、1992年度の技術的な見直し点が継続されていることの確認と、依然課題として残っている点についての新たな試みである。前年度からの課題を整理する

表3：1992年度「地域研究」学生の評価・数字一覧表

	項目	クラス	週毎の評価				全期間 の平均	全期間において各科目に占める割合	
			1週目	2週目	3週目	4週目		3ポイント台以下	4.8ポイント以上
Intercultural Research	理解度	A	3.7	4.3	4.3	4.5	4.2	3%	41%
		B	4.5	4.8	4.7	4.9	4.7		
	重要性	A	4.8	4.3	4.7	4.7	4.6		
		B	4.6	4.3	4.9	5.0	4.7		
	興味	A	4.2	4.1	4.4	4.7	4.4		
		B	4.6	4.6	4.4	4.8	4.6		
	教師	A	4.8	4.7	4.9	5.0	4.9		
		B	4.9	4.8	4.8	5.0	4.9		
Introduction to American Culture	理解度	A	3.9	4.5			4.2	13%	25%
		B	4.2	4.3			4.3		
	重要性	A	3.5	4.3			3.9		
		B	4.7	4.8			4.8		
	興味	A	4.0	4.4			4.2		
		B	4.6	4.9			4.8		
	教師	A	4.5	4.7			4.6		
		B	5.0	5.0			5.0		
Communication Skills	理解度	A	4.5	4.2	4.4		4.4	17%	21%
		B	4.7	4.8	4.7		4.7		
	重要性	A	3.8	3.8	4.4		4.0		
		B	4.5	4.7	4.6		4.6		
	興味	A	3.6	3.6	4.1		3.8		
		B	4.5	4.8	4.7		4.7		
	教師	A	4.5	4.6	4.7		4.6		
		B	4.9	4.9	4.8		4.9		
プログラム全般（3科目を通して）に占める割合							10%	31%	

と、以下の3点となる。

- (1) スケジュールの緩和
  - ・無理のない時間配分だったか。
- (2) 本学の学生や要望に対するUCDスタッフの理解
  - ・本学の学生について、その能力や期待に対する理解を得ているか。
- (3) ゴールに対する理解の共有
  - ・本学が、単にESLに留まらず、深くトピックに踏み込んだプログラムを求めていることを含め、ゴールの理解を共

有できているか。

具体的な策として、スケジュールについては、フィールドトリップの回数を軽減することで授業日数を2日増やすことができた（15→17日）。これで、1991年度から見ると、4日間増えたことになる。

残りの2点については、前年度の現地教員のうち1人が、継続して担当することになり、本学の学生やプログラムのゴールに対し経験的に理解を得ていることが、何よりの力となった。そして、その目的達成のために、

この年はリサーチペーパーを書くための科目、「Intercultural Research」がまさにメインとなり、内容の深化を助けるために、他の2科目が全面的にこれを支える形となった。リサーチ環境の改善を図ったのである。

この年も前年度にならい、5段階の数字の評価と自由記入欄の記述を中心に、評価を行う予定であった。しかし、ダイアリーの提出は全員からあったものの、毎日の評価数字にblankが多く、有効なサンプルとは言い難かったため、敢えて無理なデータの採用は避け、個々の記述を評価の主な手段とした。また、当該年度の引率者は、この「地域研究」の引率を過去に2回経験しているベテラン教師であり、過去のプログラムとの比較が可能であった。

では、結果はどうだったか。学生の反応は概ね良好であり、引率したスタッフ、UCDスタッフ共に、それまでで最高のグループであるとの評を得た。とは言うものの、すべてが満たされた訳ではない。実はこの年、双方のコミュニケーションにおいて一部誤った認識があり、リサーチペーパーへの加重が強調されたあまり、oral communicationが軽減されてしまったのである。そのためUCD学生とのdiscussionがなくなり、oral presentationの内容が薄くなってしまった。リサーチの充実のため、現地の授業自体が書くプログラム中心となっていたため、このoral面の軽減は、学生にとって「書くだけのプログラム」の印象を助長することになってしまったのである。

この年、学生のダイアリーから、ある特徴が読み取れた。それは、プログラムに対する満足度が、学生自身の目的によって異なっているという点であった。この課題は次年度へ引き継がれ、この「地域研究」にとっての過

渡期を迎えることになる。

#### 2.2.4 1994年度「試行錯誤③」

プログラムの見直しを始めて3年目、ここまでにある程度問題点も出尽くしたと言える。この年は、過年度までの集約の年とも言えるだろう。昨年度からの主な課題は次の3点である。

- (1) oral面を再度充実させること
- (2) 3科目の特徴を明確にすること
- (3) 「書くだけのプログラム」のイメージを

拭い、学生に積極的な参加を促すこと  
技術的な面はUCDスタッフに頼るしかない。つまり、昨年度までのリサーチの重み、深みを継続しつつ、3科目に特徴を持たせ、oral面を1992年度の充実した形に戻してほしいというリクエストである。この点については、頭を抱えながらも、UCDスタッフの快く積極的な協力の約束を得ることができた。中心となる科目の担当者が、前年度から継続することになり、それぞれ2年目、3年目の担当となったことも大きな助けになったと言えるだろう。

さて、残る課題はプログラムの特徴の明確化である。書くだけではない、とは言っても、書くことが中心であることには違いないのだから、イメージだけを変えても意味がない。過去の学生の感想から、得られると思っていたもの、できると思っていた経験が、ある意味で期待外れに終わっているところに、消化不良の原因が見えてくる。つまり、結果的には“盛り沢山で何でもできる”としても、主催者として、プログラムの主旨は打ち出すべきであろう、との考えである。学生自身が求めるもの、その目的にプログラムの主旨が相応しい場合に高い満足度を示しているのは、とりもなおさず学生が意欲をかき立てられる

からであり、それ故、積極的な参加が望めるからであろう。

そこで、1994年度は参加学生の募集にあたり、説明に工夫を加えることにした。具体的には、以下の3点を強調したのである。

- (1) oral communication は当然の前提として、「ペーパーを書く」ことが中心のプログラムである。
- (2) 学校ができるのはフレームを提供すること。oral面を含め、いかに中身を充実させるかは、学生自身の積極性にかかっている。
- (3) 参加を検討するにあたって、プログラムの特徴や主旨をよく理解してほしい。

更に“こんな人に受けてほしい”として、対象となる学生像を具体的に示してみた。

- ・1カ月をフルに活かして、しっかり勉強したいと思う人
- ・すべてに対して自ら積極的に向き合い、自分で解決していく覚悟のある人
- ・他者の立場を尊重することのできる人
- ・将来留学を考えていて、事前に自分を試してみたい人

1994年度の参加者は、最終的には15人となったが、その内4人は卒業後留学を目指すなど、目的意識をかなり明確に持った学生の参加が見受けられた。

この年、プログラムの主旨への理解を促す意味も込め、指導方法についても同時に改善を試みた。学生が自主性を持って取り組めるような環境作りをしたのである。後期授業のスタートと共に、学生には「手引き」のファイルを配布した。そこでは、『地域研究』とは、「留学前」、「留学中」、「資料編」の4つに分けて、プログラムの経緯やねらい、現地での授業の紹介から具体的な手続きに至るま

で、学生が理解しながら自力で準備を整えるための、一通りの情報を盛り込んだ。“ただ突き放す”のではないこと、理解を得るために、準備段階から既に留学は始まっていること、また、自力でこなせる積極性がなければ留学先でも得るものは少ないことを、学生に訴えた。その意図を理解してか、準備における書類の提出状況等は、過年度と比較しても見違えるほどの進歩を見せた。

既に述べたように、この年からダイアリーの配布は廃止している。主な理由は、ダイアリーでしか読み取れない情報については、一応の収集ができたこと、また、帰国後回収する旨は事前に伝えてあるものの、学生にとってはプライバシーをのぞかれる感が拭えないことである。そこで、評価の方法として、帰国後2種類のアンケートを行うことにした。1つは「総合評価」と称し、授業、学生自身の能力(自己判断)、生活、課外活動など、項目別の5段階評価と、その評価の根拠を簡条書きで聞くことにした。時系列でない点が異なるものの、過去の評価ともある程度の比較が可能となっている。

もう1つは、記述式のアンケートである。これは、履修にあたっての自身の状況に始まり、海外プログラムについての評価や提案、その他、現地生活に係る費用や必需品の情報もあり、後輩へのメッセージ欄を含めて、次年度の学生への情報提供も意識して作成した。時間的、体力的にもかなりハードな「地域研究」を履修するにあたり、学生が何にためらい、どのように乗り越えたのか等、学生の現状を知る上でも理解の助けとなった。

さて、見直し3年目の結果である。UCDの協力によりoral面も再度充実され、内容としては最も充実した年だと言える。現地の授業に対する学生の評価は(15人中14人より回

収)、理解度4.4、内容の重要性4.1、興味4.4、教員の熱意4.9、充実感4.4と、すべて4ポイントを超える評価であった。学生のコメントによると、一部の科目に物足りなさを感じるなど科目によっても評価が異なるため、個別の評価を求めていたらもう少し違った結果が出ていたかもしれない。

では、募集方法を変えたことで変化はあったのだろうか。数字等で測ることは不可能だが、1994年度の学生には、過年度との顕著な違いが見られた。取り組む姿勢である。学生のアンケートへの記述からは、半数以上の学生が午後の自由時間の主な活動に「勉強」を挙げ、その際、積極的に、また楽しんで図書館を利用していった姿がうかがえる。過年度は、規模が大きすぎて使いこなせないと敬遠されていた図書館の利用が、プログラムの重要な位置を占めることになったのは、特筆すべきことである。

もう一点、触れておきたいのは、学生が自ら学びの環境を作ろうとした点である。事前のオリエンテーションにおいて指導していたことではあったが、oral communicationの場を作るために、学生たちは学生間でも英語で話していたというのである。これも過年度との大きな変化と言えるだろう。

1992年度から、学生たちの自主性によって論文集を作成しているが、1994年度は15人全員が参加して、100ページを超える大作が仕上がった。以前の、自身のリサーチに満足できず参加を諦めた学生を思うと、喜ばしいかぎりである。

## 2.2.5 現地の生活・課外活動

評価報告の最後に、現地の生活・課外活動について触れておきたい。

まず、ホームステイである。ホストファミ

リーは、予めUCDスタッフが面接をし、目的意識や状況を確認した上でUCDに登録された家庭である。Davisでの4週間は全員がホームステイとなるが、特にプログラムが冬の開催になってからは、クリスマスの影響もあり、受け入れの可能なホストファミリーの確保は容易ではない。そこで、本学からは、家庭内の受け入れ状況が安定していること、英語が母国語であること、通学路(家から学校まで)の安全が守れること、の3点のみをリクエストし、可能な限り学生1人が1家庭に、無理であれば2人1家庭までを了承する、としている。数よりも、UCDスタッフが推薦する家庭への滞在を優先するためである。

学生にとってホームステイは大きな関心事である。それだけに、2人1家庭の滞在は、時に受け入れがたいものとなるようだ。しかし、最終的な学生の満足度が滞在人数に因らないことが、過去の学生のアンケートからもわかってきた。そこでオリエンテーションにおいて、2人1家庭の滞在でも、コミュニケーションは2分の1ではないこと、また1人で滞在する場合もとりたてて不安を感じる必要はないことを伝え、与えられた状況を活かすことの大切さを強調するようにした。学生の意識が変わったせいも、1994年度には滞在人数について不満を示す学生は皆無であった。

帰路の1日観光は、開講9年目の1993年度より、行き先をディズニーランドからサンフランシスコに変更した。“せっかくの海外で、どこにでもある遊園地に行く”ことに、毎年約半数の学生から疑問の声を聞いたからである。行き先の変更にあたり、その行動の形態が委員会の検討事項となった。学生に自主性を発揮する機会を与えるためには自由行動を

容認したいが、場所によっては治安面で不安のある地域において、それが適当か否か、が論点である。議論の末、委員会は学生の自主性を尊重することを決定した。その際、行動は3人以上のグループによること、予め大まかな計画を書面で引率者に伝えること、そして、旅行社からの“犯罪に遭遇する危険性の高い地域”についての情報を地図で伝え、その区域への立ち入りを禁止すると共に、行動範囲と時間帯を制限した。

行き先を変えて2年になるが、多くの学生が、計画や行動を任された点を評価している。心配された安全面もこの2年間守られており、学生は、実際現場にいて“自己をしっかり持つことの重要性を感じた（アンケートより）”ようである。

### 3 まとめと今後の課題

#### 3.1 まとめ（評価を経て）

「地域研究」に関する試行錯誤の数年間を通し、学校主催のプログラムに必要な視点が表れてきた。その第一は、主催者側が確固たる主旨を学生に示すことの大切さである。もちろん、いつの場合も主役は学生であり、学生の要望、期待を眼中に入れることは忘れてはならない。しかし、そもそも1つのプログラムで全てのニーズに応えることは不可能である。その変え難い事実を受け入れ、間点を広げんがために主旨が曖昧になってしまうことは、学生のためにも避けなければならない。むしろ、プログラムの性格を率直に伝え、その上で選択権を与えることの方が、学生にとってプラスであるに違いないからである。

二つ目は、提携する機関、そのスタッフの協力が、プログラムの向上には不可欠であるという点である。実際にプログラムがスター

トすれば、ある程度は提携校に委ね切る姿勢が必要となる。そのとき頼りになるのは、全てを把握している現地スタッフの存在であろう。その熱意は、授業内容だけでなく、緊急事態の対処を含めた現地スタッフの体制にも、大きく関わってくるはずなのである。

最後の一点は、双方の絶え間無いコンタクトの重要性である。前述のように一旦プログラムが始まってからは、提携校に委ねることも大切であるが、開始前の検討と終了後のフィードバックは、欠かせない要素である。また、まさに「継続は力」であり、プログラムの主旨・方向や、本学の学生のこと、その能力、向上心、目標の高さ等の理解は、一朝一夕に望めることではない。その理解を経験的に持てることは理想であるが、担当者が入れ替わる可能性も考慮に入れて、情報をつなぐことをも念頭においた体制が必要であろう。

#### 3.2 今後の課題

本学の「地域研究」は、ある程度の内容、量の文献を読み、リサーチペーパーを書き、その結果を口頭で発表、質疑応答するという内容において、留学にも対応できる力を養う、また、留学を体験してみる、という目的には、ある程度応えることができる。プログラムの特徴を明確にし、活かすという点では、学生の満足度も含め、一応の成功をみていると言えるだろう。

本学では1995年度より新たな短期留学プログラムがスタートし、行き先、内容ともに少し幅は広がったものの、参加者の枠（人数）を含めて、決して多くの学生のニーズに応えられているとは言い難い。様々な角度から国際交流を捉えるためにも、多様性のある留学プログラムを持つことが大学に求められてい

るのではないだろうか。

そこで改めて立ち返らねばならないのは、今後、短期留学自体をどう位置づけていくか、という点である。これには2つの視点が考えられよう。

その一つ目は、“大学における”短期留学の位置づけである。現在、本学ではカリキュラムに完全に組み込んだ形で、学問的な効果を期待したプログラムを設けている。しかし、大学によっては、学問的にはあまり期待せず、主に18歳人口の減少に備えた学生募集対策の一端として実施しているところもある。その是非をここで論ずることは本稿の目的からは外れるが、幅広く学生のニーズに応えることができる、学年を越えたつながりが生まれる等、学問以外の収穫も多く、学内の活性化にも一役買っているという一面があることも否めない。企画の上で大切なのは、大学においてこの種のプログラムを設ける際に、まず学内に於けるその位置づけを明確にすることではないかと考えるのである。

もう一点は、“長いスパンで捉えた短期留学への視点”である。本来、「留学とは将来の生活設計のプラスになる形ですべき(日本国際教育協会留学情報センター、1994)」であり、自分自身の目標を明確にし、その達成のために留学という手段が最も適切な選択かどうかを見きわめることが必要となってくる。「自分の将来を考えた長期的展望のもとに留学計画を進めれば、期待する効果が得られる(前掲)」「将来の展望、卒業後の進路なども含めた留学の意義も見定める必要がある(日米教育委員会、1994)」とあるように、学生が自身の将来という長いスパンを見越して位置づけられるようなプログラムの選択肢と、その提供の仕方を検討することが、大学にも求められよう。本学でも、卒業後、継続して学ぶ

ことを望む学生が増加している。自分の目標達成のために、どこでどのような教育が得られるのか、その幅、その可能性を広げることも、短期留学プログラムの持つ可能性として考えられるだろう。

1995年度の外国人留学生問題研究会(JAFSA)夏期研究会においても、“アジアの国との提携を如何にして開拓するか”が大きな関心事の一つであったが、日本人留学生の大学、大学院在籍者数を見ると、85%がアメリカ、イギリス、カナダを選択しており、留学先別ではアメリカ32,807人に対し、中国1,112人、韓国627人、フィリピン47人、インド19人など、アジアへの留学は少ない(国際教育交換協議会、1993)。本学では、第二外国語として中国語、朝鮮語を履修することができるが、その履修生の満足度は際立って高く、また、数の上では少数ながら、アジアの大学への留学を希望し、入手可能な資料の少ないことを嘆く学生もいる。先に述べた留学生数のばらつきは、留学生の希望だけでなく、留学手続きの難易等も反映しているのかも知れない。だとすると、個人では実現の難しい国へのアプローチを大学が助けることにも、意味がありそうだ。それがプログラムの、そして学生自身の可能性を開くことにつながるとも考えられるからである。

いずれの方向をとるにしても、大学としての方針を明確に持つこと、同時に、主役は常に学生であるとの視点を持ち続けることはやはり重要であろう。その大切さを心に刻みつつ、今後さらに充実したプログラムの構築を目指すものである。

<引用文献>

ブリティッシュ・カウンシル 1994, 「英国留学の手引」。

国際教育交換協議会 1993, 「CIEE ニュースレター No. 1」。

日米教育委員会 1994, 「アメリカ大学留学の手引」。

1995, 「英語研修の手引」。

日本国際教育協会留学情報センター 1994, 「海外

留学の手引き」。

College Entrance Examination Board 1994, *The College Handbook Foreign Student Supplement*.

Institute of International Education 1992-93, *Open Doors: Report on International Exchange*.